視覚障害の擬似的体験に基づく食事援助についての検討

A棟7階北病棟
○大　上　幸　子　　勝　良　敬　子
山　本　晶　子　　森　脇　登美子

Ⅰ．はじめに

一般的に、視覚障害者の食事の仕方は、主食に副食を全部上のせて、一つの食器で食べる人が多く、食事を楽しみながら味わって食べるのではなく、単に生理的な意味で空腹感を満たすために食物を口に運んでいる場合がほとんどである。

現在当病棟では視覚障害のために食事摂取が困難な患者に対して、手を触れさせながら食器の位置を確認してもらい、食事メニューを説明し、魚の骨を取り除いたり、調味料をかける等の介助をしている。しかし、面倒くさいと言って、結局主食に副食をのせて食べていたり、手づかみで食べている患者がおり、今の援助では不十分ではないかと思った。実際に自分達が患者と同じ状況で食事をすれば、困難な点または解決方法を知ることができ、適切な援助方法が導きだされるのではないかと考えた。そこで看護婦自身が擬似的に視覚障害のある状況下で食事体験を行い、患者の状況が把握でき、具体的な援助方法を知ることができたので報告する。

Ⅱ．研究方法

1）期間

平成12年9月1日～平成12年9月18日

2）対象

当病棟所属の看護婦13名

3）方法

できるだけ患者と同じ状況にするため、まず使用する食器は、当病院で使用している給食課の食器を用い、食事は給食課のメニューを参考に自分達で用意して、位置を設定した。（図1参照）対象者にアイマスクを装着してもらい、擬似的に視覚障害のある状況とし、テーブルは床頭台と同じ高さのものを使用し、パイプ椅子に座ってもらった。そして、手で食器を触れさせながら、食器の位置は左手前、右手前、左奥、右奥というように説明し、食事の内容は、できる限り詳しく説明するため、メニューだけでなく、使用されている食材の種類、大きさ、個数や味つけも説明し、食事を摂つてもらった。（図2、3参照）食事終了後全員に、食事援助に関するアンケートを実施した。（表1参照）

Ⅲ．結　果

配置の説明は日頃見慣れていることもあるが、手で触れることでわかりやすく、全員わかるとの解答であった。食事内容の説明は12名がわかるとの答えであったが、何cmと説明されても

想像できないためわかりにくいという意見もあった。食材の大きさはその日の食事内容によって大きい7名、調度良い6名との2つの意見に分かれた（図4参照）口までの距離感は9名がわからなかったと答えた。味はわかりにくいという意見が8名と多く、温度はほぼわかるとの意見であった。食べた量、残量はお箸に食物が当たる感触だけでは確認が困難なため、9名がわからないと答えた。食べにくい食材は、大きさで左右されるものもあるが、全員があると答えており、特に魚とご飯が食べにくいという意見が多く、理由として魚は小骨が刺さりそう、お箸でほぐすのが困難、ご飯はどれだけすくっているかわからないという意見であった。今まで当分が想像していた状況と比較し、思っていた以上に困難であり、想像と違うという意見がほとんどであった。（図5参照）食事を楽しめたかという質問に対し11名が楽しめなかったと答えており、理由として不安や恐怖感がある、味わえない、食べこぼしがないかわからず周囲の目が気になるなどがあった。（図6参照）その他の意見で、一皿に何種類もおかずがのっているとわかりづらく、味が混ざる、嫌いな物も食べてしまい不快だった、食事の途中で食べた状況がわかれば良かった、お箸よりフォーク、スプーンの方が食べやすいと思うなどが聞かれた。

Ⅳ．考　察

佐藤は「視覚障害者の看護にあたっては、看護婦は患者の日常動作に関して、どの程度外界の情報を得ることができないかを把握し、その程度にあった指導、援助を行うことが必要である」と述べている。今回の患者体験をしたことで、「小骨が気になって食べにくい」「ご飯はどれだけすくえているかわからない」といった実際にどういった点が困るのかが把握でき、また、「おかずはできるだけ一口大に大きさをそろえ、ご飯はおにぎりにした方が食べやすい」といった具体的な援助方法を知ることできたと思われる。

人間にとっての食事は、栄養を取ると同時に生活のなかの楽しみのひとつでもある。しかし、体験でも9割の人が楽しめなかったと言っており、視覚からの情報の重要性を認識することができた。そこで、いかに患者に楽しんで食事を摂ってもらうということが課題としてでてくるが、不自由さを解決させるだけでなく、食事を想像しやすいよう色彩や味つけ、どのように盛り付けているかなども説明にとりいれていく必要がある。また体験の意見の中に、「一人で食事するのは淋しい」、「人目が気になる」といった精神面での意見も聞かれており、患者がどういった環境で食事を摂りたいと思っているかを知り、援助していくことも、楽しく食事をしてもらうために必要だと思われた。

Ⅴ．おわりに

食器、盛り付け、色彩の取合せなどの視覚的アピールは食欲を誘う重要な要素であるが、それが阻害された場合に伴う様々な心理面・行動面への影響を、今回の研究により理解することができたと思われる。

今回は改善策をたてて、実際に患者に食事摂取をしてもらい評価するというところまで至らなかったため、今後この体験の結果に基づき援助を行い、更に食事を楽しく摂ってもらえるように努力していきたいと思う。

参考文献

1）荒川文子：視覚障害者の食事ケア，臨床栄養，Vol.95　No.5，pp.570，1999

2）沢田千恵子：視力障害者のデイルームにおける食事に対する意識調査，看護学雑誌、Vol.62　No.5，pp484～487，1998

3）鈴本文子：失明初期の視覚障害者の日常生活動作の自立への援助，臨床看護，Vol.16　No.2，pp258～265，1989

引用文献

1）佐藤　忍：視覚障害者をきたした患者の看護，臨床看護，Vol.13 No.11，pp1654～1658，1987

表1．アンケートの内容

アンケート

視覚障害者に対する食事援助に関する皆様の意見を聞かせていただきたいと思いますのでご協力お願いします。　以下の質問で該当する番号に丸印をつけて下さい。

1．食事の配置の説明はわかりやすかったですか。またその理由をご記入下さい。
　1）わかる　2）わからない　（理由：　　）

2．食事の内容の説明はわかりやすかったですか。またその理由をご記入下さい。
　1）わかる　2）わからない　（理由：　　）

3．食材の大きさはどうでしたか。
　1）大きい　2）調度良い　3）小さい

4．口までもっていく際の距離間はどうでしたか。
　1）わかる　2）わからない

5．普段食べている時と同じように味がわかりましたか。
　1）わかる　2）少しわかりにくい　3）わからない

6．食物の温度はわかりましたか。
　1）わかる　2）わからない

7．自分の食べた量、残量はわかりましたか。
　1）わかる　2）わからない

8．食べにくい食材はありましたか。1）と答えた方はその食材と理由をご記入下さい。
　1）ある　（　　）　2）ない

9．自分が想像していた状況と比べてどうでしたか。
　1）想像どおり　2）想像と違っていた。

10．食事を楽しむことができましたか。
　1）楽しめた　2）楽しめなかった

11．その他困った点、ご意見があればご記入下さい。

ご協力ありがとうございました。　H12．9．

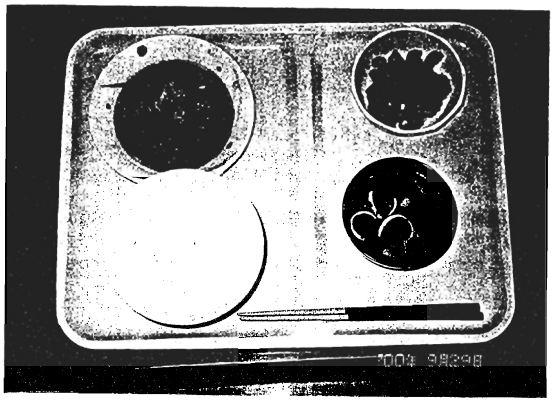

図１．食事の配置

図２．食事説明の状況

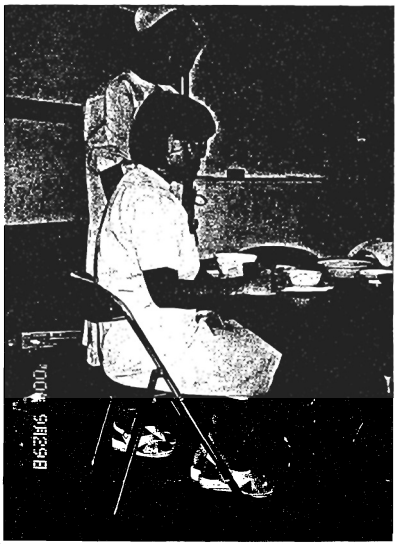

図３．食事をしてもらう状況

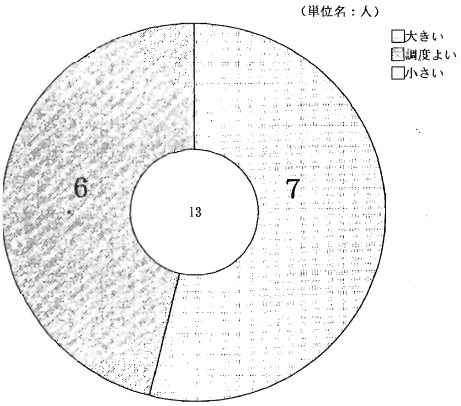

図４．アンケートの結果：食材の大きさ

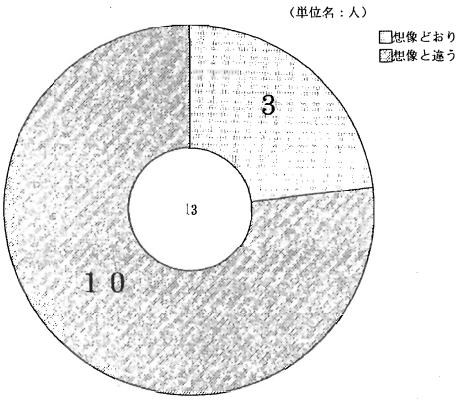

図５．アンケートの結果
：自分が想像していた状況との比較

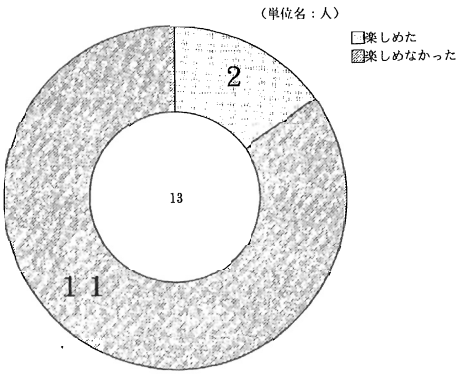

図６．アンケートの結果：食事が楽しめたか